

松山の野鳥観察案内 — ミヤマガラスとコクマルガラス —

清 水 孝 昭[※]

晩秋から冬期の朝早く、松山市から川内町方面へ抜ける国道11号線の牛淵地区のあたりを車で通過していると、道路沿いの電線に無数のカラスがとまっているのを見かけるようになる。日にもよるが、ざっと千羽以上はいると思われる。互いに身体を寄せあい押しあい、これから餌場へ向かう前のほんのひと時、身体を暖めているようだ。一見何の変哲もない、しかしカラスにしては大きな群れだな、という光景で、特に気をつけて見ている人もいないようである。ところが彼らをよく注意してみると、このあたりで普通に見かけるハシボトガラスやハシボソガラスに比べて一回りほど小さいことに気がつく。さらによく観察していると、その群れの中にさらにもう一回り小さな個体が何割か混じっているのが判る。そばに寄ってよく耳を澄ますと、鳴いているのは小さい方のカラスであろうか、「クルル」とも「ミャオミャオ」とも聞こえるとても可愛らしい声が聴こえてくる。

やや大きい方のカラスはミヤマガラス、小さい方のカラスはコクマルガラスといい、普段は前者はユーラシア大陸の冷温帯から亜寒帯にかけて、後者はユーラシア大陸中南部と北アフリカに生息しており、ともに冬場にこの地方へやってくる渡り鳥である。ミヤマガラスの方はおでこがやや出っ張っており、くちばしは上下にやや広く根元が少し白っぽい色をしているのが特徴で(写真1)、コクマルガラスは頭が平らでくちばしは細く、ハシボソガラスを二回りほど小さくしたようなスマートな体型をしている。コンラート・ローレンツの「ソロモンの指輪」を読んだことのある方なら、その中に「チョック」という名のコクマルガラスがでてきたことを覚えているのではないだろうか。彼の腕白ぶりはローレンツがこまやかに書き記しているが、これまでに観察した感じではミヤマガラスよりもコクマルガラスの方がやはりにぎやかで、じっとしていない性格のようである。

朝のうち電線にとまっていた彼らは、やがていくつかの群れに分かれ、近くの田畑に降りて餌を探し始める。2種類のカラスが混じっているのに特に喧嘩もなく、群れで一緒に行動している。大きな群れを見つけたら、特にコクマルガラスの方に注意して観察してみたい。運がよければその中に数羽、頭の後ろ半分と胸から腹のあたりが白い、パンダ模様の個体が発見できる(写真2)。これはコクマルガラスの淡色型と呼ばれるもので、一度見たら二度と忘れられないかわいい奴らなのである。1992年の11月に観察したときには、500羽

くらいミヤマガラスの群れの中にコクマルガラスが約一割、その中に淡色型が4羽混じって楽しげに曲芸飛行を繰り返していた。

カラスの仲間には、カササギやカケス、オナガなどのようにきれいな色の仲間もいるが、コクマルガラスの淡色型のようにどう見てもカラスの体型で、ヒヨドリよりちょっと大きいくらいのサイズ、しかも白黒のパンダ模様、というのはそういった仲間たちに負けず劣らずなかなか楽しませてくれるキャラクターの持ち主であるといえよう。彼ら自身も仲間達と違う、その変わった羽の色に気づいているのか、電線にとまるときも淡色型同士は近いところに集まっているように見える。

夢中で彼らを観察していると、何でカラスなんか見てるんだろう？と言いたげな顔で通行人が行き過ぎてゆく。中にはカラスがあんなにたくさんいて気持ち悪いとでも思うのか、眉をひそめて見る人や、時には石を投げて追い払おうとする人まででてくる始末である。遠い国から海を越えてはるばる松山までやってきた彼らを、どうか暖かく見守ってやってほしいものである。

冬が深まるにつれて彼らの群れはばらばらになり、数羽〜数十羽のグループを残していつもの場所からいなくなってしまう。松山平野中に散らばってしまったのか、それともどこか他の場所へ飛んで行ってしまったのかはよくわからない。彼らとつきあいはじめてまだ3年だが、群れの大きさは毎年だんだん大きくなっているように思える。今年の秋にははたしてもっとたくさんの仲間達に出会えるであろうか、楽しみである。

(しみず たかあき)

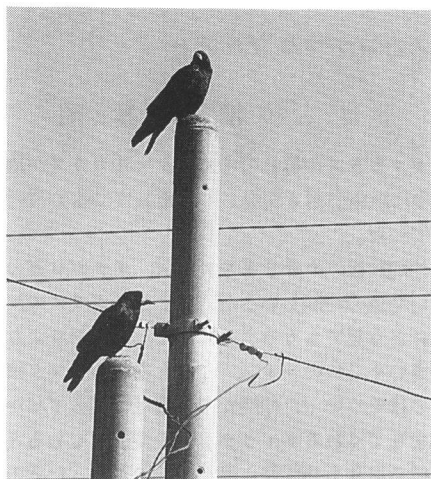


写真1 電柱にとまるミヤマガラス
(温泉郡重信町牛淵 1992年11月)

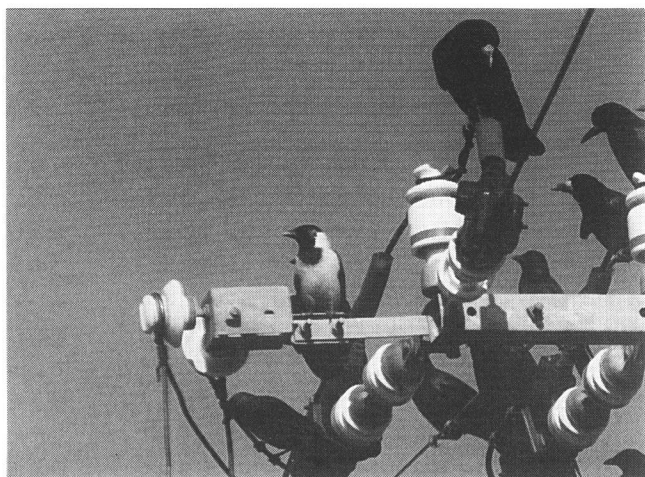


写真2 コクマルガラス淡色型
(中央, 温泉郡重信町上原 1992年11月)